

## 羅津・先鋒訪問記

ERINA調査研究部研究員 三村光弘

2003年9月22日から24日までの3日間、北朝鮮の羅先経済貿易地帯を訪問した。目的は、羅先の投資の現状と経済状況の調査であった。今回が筆者にとっては初めての羅先訪問であった。(平壤は3回訪問)この訪問について、報告したい。

### 9月22日(月) 延吉 羅津

朝、旅行社職員との待ち合わせ場所に向かう。ここで羅先市人民委員会発行の招請状を受け取る。今回の訪問は、中国の旅行社を通じて観光の形式で招請状を取得した。韓国人は別として、それ以外の外国人であればほぼ問題なく招請状を取得できるようだ<sup>1</sup>。

7時30分に延吉の白山大厦(ホテル)を出発し、10時前に圈河の税関に到着した。ここには、出国審査場の手前に携帯電話預かり所があり、1回5元(1元は約13円)で携帯電話を預かってくれる。この税関にある出入国管理局では、出国時に帰りの入国カードを記入し、その裏に出国のスタンプを押す運用を行っている。出国審査を終えたところに小さな免税店がある。

中朝国境の図們江(朝鮮側では豆満江)にかかる元汀橋は歩いて渡ることが禁止されているため、中国側の税関と朝鮮側の税関を結ぶ国際バスが運行している。運賃は5元で、所要時間は数分である。



写真1 元汀橋(手前が朝鮮、向こうが中国)

朝鮮の元汀税関は中国の税関と異なり、検疫、入国審査、

税関の区域が出国と入国で別になっていない。荷物の検査はX線で行い、出版物の持ち込みにうるさい。しかし、態度は紳士的である。(検査官は女性だったので淑女的というべきか)

税関に入ると羅先市人民委員会観光管理局(つまり、市役所の観光課)の指導員(職員)が出迎えに来てくれていた。この後、この指導員とガイド(朝、日、英、中、口語ができる)、運転手(観光会社の副社長が担当)と筆者の4人で行動することになる。車は日本の中古車で、三菱の四輪駆動のワンボックスカーだった。



写真2 非舗装道路

元汀から先鋒までは非舗装道路が続く。よく整備をしているようだが、台風14号の大雨の後だったため、かなりの悪路になっていた。峠道では20~30kmくらいしか出せない。沿道には花が植えられており、それなりに気を使って整備を行っているようだ。先鋒に入ると道は一応舗装されており、乗り心地はよくなる。勝利化学工場を左に見ながら、羅津市内へと向かう。勝利化学工場の周辺では、化学臭がした。工場の設備からは一部煙が出ており、若干稼働しているようだった。最近、KEDOの重油が入らないので、リビアやイランから原油を輸入して、この工場で精製しているとのことだった。

羅津到着後、羅津ホテル近くの南山閣というレストランで昼食をとる。大同江ビールは大瓶(640ミリリットル)で7元、BC(冰川ビール:延辺のビール)なら5元。日本のビールもあり、サッポロとアサヒの350ミリリットル缶が9元であった。周りを見てもほとんどがBCを飲んでいたので、輸入ビールを飲まずに、平壤から大同江ビールを運んで来て売れば外貨収入が増えるのになぜ中国のビールを輸入するのかと聞いたところ、量的に需要を満足できないとのことだった。

平壤から羅津までは700km近くあるが、琿春なら90km。

<sup>1</sup> 羅先経済貿易地帯では無査証制度を実行しており、『羅先経済貿易地帯外国人出入および滞留規定』第7条では、同地帯に外国から直接出入りする場合には、招請状があればできるすることができるようになっている。

距離を考えれば延辺から持ってくる方が合理的なのかもしれない。羅先経済貿易地帯通関規定には、観光業で使うための物品は免税で持ち込めることになっているが、ビールだけを考えても、この措置は実情にあった合理的な措置だといえる。

食事後、羅津ホテルへ。中国人観光客の到着と重なり、混雑していた。エレベーターは団体の到着時と出発時のみ運行されていた。3階の316号室に宿泊。ツインルームの部屋の中は中国の3つ星か2つ星ホテルと同じくらい。絨毯は少し汚れている。

風呂場はタイル張りだったが、仕事が粗いようで、少しでこぼこ。温水は夕方しか出ないとのことだったので、少しベッドに横になる。ベッドは硬くて腰が痛くならず、シーツも衛生的であった。元々朝鮮の人々は堅いオンドルの床に薄い布団で寝る習慣があるので、ベッドも硬いものが好みなのだろう。中国の安ホテルに泊まると時々ベッドが柔らかすぎて腰が痛くなることがあるが、朝鮮では翌日泊まった琵琶旅館も含めてベッドは堅めが多いようである。

ホテルで少し休んだ後、羅津港参観へ。港には3つの埠頭があり、第1埠頭はロシアから鉄道で運んできた化学肥料を積み出すために使われており、ロシア船籍の船が入港していた。第2埠頭は中国の現通集団が借りているコンテナ埠頭。現在1ヶ月に3便が釜山との間を往復しており、主な荷物は木材チップだそうだ。第3埠頭はバラ積み船用



写真3 羅津ホテルから見た海



写真4 羅津港第3埠頭に積み上げられている古タイヤ

の埠頭で、羅津市貿易管理局所属の船、テボサンが停泊していた。埠頭には日本から運ばれてきた古タイヤやタイヤを粉碎したものが山積みされていた。中継輸送をしているという説明だった。港は観光コースになっていて、中国人観光客も続々と見学していた。

16時より南山ホテル横の文化会館にて、子供たちの公演を見る。「金正日將軍の歌」の合唱から始まり、様々な歌、踊り、組体操などを見せてくれた。公演は1時間ほどだったが、平壤の学校で行っているそれと比べても遜色のないものだった。



写真5 子供たちの公演の様子

公演後、羅津市場の見学へ。内部の写真は撮らないように注意された。市場の規則として禁じているというよりも、中で商売をしている人（ほとんどが女性）が商売をしている写真を撮られるのを恥ずかしく思うために避けなければいけないようだ。建物の中には衣料品に使う小物（はさみ、糸、ボタン等々）の大きな売り場、副食品（加工食品が主）売り場、衣料、靴、電気製品などの工業製品売り場などがあり、建物の外側には野菜、米などの売り場がある。肉は中、魚は外で売っていた。肉は豚肉、鶏肉など。精肉よりも豚の顔や内臓が主に売られていた。市場には人があふれ、市場の外側の道にも野菜などを売る人々が並んでいる。これも写真を撮ることができなかったが、中越国境の街、モンカイの市場を秩序よくして、食堂を除いたような感じだろうか。売られている電気製品や衣類、加工食品の多くは中国製であった。ガイドさんの話によると、靴にしても、自動車にしても日本製は丈夫で長持ちするが、値段が高いため、お金がない今のところは中国製で我慢するしかないとのことであった。街を走っている日本車（右ハンドルの中古車がほとんど）を見ても、日本製品の市場としての朝鮮の潜在的可能性を感じた。ちなみに、韓国製品は現通集団の中国からやってくるトレーラーが現代製である以外、市内ではあまり見かけなかった。

市場を見た後、ホテルへ向かい、風呂を浴びた後夕食を

とる。夕食のメニューはあひろの焼き肉。平壤でもそうだが、牛よりもアヒルの方が柔らかくて油があっておいしい。その後カラオケへ。中国人観光客でいっぱいだった。4人で缶ビール12本ほど飲んで400元。中国人観光団には、中国人のガイドの他、朝鮮人のガイドが付いている団もあり、朝鮮人ガイドは中国の歌をサービスで歌うということではなく、朝鮮の歌を歌っていた。朝鮮の歌の他に中国の歌、日本の歌、英語の歌などがあり、機械は延辺のカラオケ店のものと同じだった。

### 9月23日（火）羅先市内

この日は朝8時頃起床し、キムパブ（海苔巻き）の朝食。これは筆者の好物で前日に食べたいものを聞かれたときに答えたものである。中国人観光客にはマントウ（餡の入っていない蒸しパン）、粥などの中国風朝食が供されていた。朝食後、観光記念品商店へと向かう。この商店には牛黄などの漢方薬、何冊かの本や朝鮮料理解説のパンフレット、おみやげ用の雑貨などを売っていた。特に買うものがなかったので、次に外国語の出版物を取り扱う書店に向かったが、営業していなかった。

その次に切手を売る店に行った。朝鮮では切手が輸出品として取り扱われており、この店でも中国人に人気のありそうな毛沢東や鄧小平、劉少奇など、中国の歴代指導



写真6 羅津市場の外観



写真7 羅津の街角

者の切手が多く展示され、中国人向けの品揃えとなっている。小泉首相と金正日国防委員長との首脳会談のものもあり、1ユーロ、日朝平壤宣言の署名風景が0.8ユーロだった。

北朝鮮の外国人向けの店は昨年11月のドル流通禁止を受け、ユーロ建てで価格を表示している。合計19.6ユーロ分を買い、20ユーロ札で支払いをする。店員さんはユーロ紙幣を初めて見たようで、裏返したり、ホログラムを見たりと、興味津々な様子であった。0.4ユーロ分のおつりは人民元でもらった。

切手屋さんを後にして海水浴場の見物に向かう。もう水泳の季節は過ぎているので、海水浴場には誰もいなかった。その後、峠を越えてエンペラーグループが経営するカジノホテルに向かう。その途中、羅先大興貿易会社の水産加工工場を峠の上から見た。水産物を加工して、日本などに輸出しているとのことだった。



写真8 羅先大興貿易会社の水産物加工工場



写真9 エンペラーホテル

エンペラーホテルは、非常にきれいな作りで、確かに5つ星ホテルといえる豪華さだ。ホテルの敷地内だけが別世界で、現地の人は案内員といえどもロビー以外には入れないようだった。物価は中国並み。コーヒーとスイカジュース各1杯で44元だった。カジノはそれほど大きくないが、各種のゲームとスロットマシンがある。大小もあるあたりが、中国系のカジノらしい。ものは試しにやってみたが、20ドルが結果的に100ドルになった。換金時に人民元とド

ルの交換手数料を10元取られたが、ちゃんとドルで返してくれた。このカジノ客はほぼ全員が中国人だ。駐車場には吉H、吉Bなどの吉林ナンバーの車がたくさん止まっている。このホテルの宿泊料は最低でも1泊680元する高級ホテルだからそのホテルまで自家用車に乗ってくる客は、かなりの金持ちだろう。

エンペラーホテルを後にして、昼食のために琵琶島という、湾内に突き出した小島に向かう。本土との間は土手で結ばれている。島の端に展望レストランがあり、海風に当たりながら食事ができるようになっている。それほど豪華な作りではないが、海のない中国の東北地方から来た客にとっては絶景なのだろう。

この食堂では、貝やウニなどを生け簀に入れてある。ほしいと思ったら指さして料理法を伝えればすぐに料理して出してくれる。生け簀は海とつながっている。琵琶島の海は澄んでおり、海水をそのまま飲んでも問題ないくらいだった。



写真10 琵琶島の海。透明度が高い。

食事をした後、ガイドさんと世間話をする。羅先では市場の性格が変わったのが数年前であったこと、2002年7月1日の経済管理改善措置前後での一般市民の暮らしは、お金のことを考えずに済んだ分、以前の方がよかったとのこと。給料は3,000～4,000ウォンから7,000～8,000ウォンの間だそう。ガイドは観光客の多い夏は給料が高く、観光客の少ない冬になると安くなるそう。市場で商売する人も小さい商いの場合は、1ヶ月3,000～4,000ウォン程度の収入で、自転車など大きなものを扱う人はもっと大きな収入を得ているらしいとのことだった。

レストランを出て、宿泊する琵琶旅館へと向かう。このホテルは故金日成主席が泊まったことのある由緒のあるホテルであるとの説明があった。この日は井戸水をくみ上げるポンプが、電源周波数の変動により動かないために断水していた。ホテルの従業員が40リットルほどはいる桶に水を入れて持ってきてくれた。部屋は広く、眺めもよいし、騒音もない。ゆっくり休むにはよい場所だと思った。

少し休んでから羅津ホテルに按摩に行く。1時間50元であった。おばさんが一生懸命やってくれたが、すごくまいわけでもなかった。サウナは20元だが、入らずに帰ってきた。その後琵琶旅館に戻って夕食。羅津のキムチは海水で白菜を洗ってから作るそうで、味が濃いめな割には塩味がまるやかでおいしかった。松茸料理が出たが、八宝菜のような炒め物の中に入っていたので、日本人が好む松茸料理として、松茸ご飯と焼き松茸の紹介をした。



写真11 琵琶旅館での夕食。左下が松茸入り炒め物。



写真12 羅先市人民委員会（市役所）の玄関

### 9月24日（水）羅津 延吉

朝8時に朝食。メニューはユッケジャン（辛い牛肉スープ）、肉まんじゅうなど。朝食後羅先市人民委員会（市役所）を訪問した。経済協助局の嚴興男局長と面談し、羅先への投資について議論する。外国からの投資については、アメリカや日本の経済圧殺政策のために外国からの投資は緩慢であるが、中国やロシアとの水産加工分野での案件がいくつか増えたとのこと。外国からの投資はすべての分野で行うことができ、民間経済交流は歓迎しているとのことであった。日本からの投資についても、国家間の問題とは関係なく、政経分離で対応しているので、以前と変わりなく歓迎しているとの発言があった。

人民委員会を出て、外国からの投資（日本、オーストラ



写真 13 昼食メニュー。羅津豆腐はおいしい。

リア)で経営されているという商店をいくつかまわったのち、旅行社の食堂で昼食をとった。羅先の名物のひとつがにがりを使わず、海水のにがり成分を使って固めた羅津豆腐。塩味はほとんどなく、海水を使っているのは言われなければわからない。この食堂では、味噌と醤油は自家製だとのこと。素朴なメニューだったが、日本ではなかなか味わうことのできない有機栽培の大豆や野菜、天然塩を使って醸造した味噌や醤油で統一されたメニューだった。

昼食後、羅津市場を再び訪れた。市場の建物の約半分が企業が出展していると見られるガラスのショーケースがある売り場で、半分くらいは個人が出店するスペースになっている。個人売り場では、間口80センチ、奥行1メートル20センチ位のスペースに各個人が売っているものが並んでいる。糸や爪切り、はさみなどの裁縫道具、石鹸やクリームなどの化粧品類、コンセントやコードなどの電気器具、中古のトランスや日本のパチンコ台からとってきたと思われる基盤など、さまざまなものが売られていた。市場の中では、同じものでも売っている人や店によって値段が違うのがおもしろかった。

市場を後にして、先鋒の革命史跡地をいくつか案内されながら、国境へと向かう。先鋒から元汀税関までは1時間強で着いた。15時から午後の出国手続が開始されるので、15時には税関についていたのだが、係員のうち1人がこないため、手続開始が25分遅れた。その後、国境越えのバスに乗って橋を渡る。料金は5元。はじめは2台止まっているバスのうち、朝鮮国籍のバスが先発との案内だったのに、中国国籍のバスにお客さんが先に乗ってしまい、朝鮮のバスの運転手は激怒。ガイドに向かって罵詈雑言を浴びせかけていた。結局、お客がいっぱいになった中国のバスが先に出発することになり、朝鮮のバスに乗っていたお客も中国のバスに乗り換えた。バスは数分で国境の元汀橋を渡り、中国の圈河税関に到着した。圈河からは車で約1時間40分で延吉に到着した。